J.A.D.E

ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者　稲場紀久雄（運営委員会代表）
編集担当　酒井彰（事務局長）
令和 3 年 4 月 10 日　通巻 102 号

ふくりゅう 102 号　目次

バルトン先生　復元胸像除幕式		
台北－東京間リモート同時開催方式で挙行される！	稲場紀久雄	1
「日水コン水インフラ財団」設立と NPO への期待	野村　喜一	2
地球環境基金助成活動報告－コロナ禍のなかでの活動実施―	酒井　彰	3
『江戸名所図会』に描かれた江戸の下水道（1）	栗田　彰	4
運営委員会から／編集後記		5

バルトン先生復元胸像除幕式
～台北-東京間リモート同時開催方式で挙行される～

本会代表　稲場　紀久雄

バルトン先生の胸像が戦後 76 年振りに復元され、除幕式が台北市自来水（水道）博物館で 3 月 30 日午前 10 時 30 分（台湾時間）からおよそ 1 時間に亘り開催されました。式典は、台湾、日本、英国 3 国の共同開催。初の試みとして台北会場と駐日代表処（白金台）の東京会場とをリモート方式で結ぶ同時開催方式が採用されました。開催直前まで両会場のプログラムがスムースに一体化できるか、不安がありましたが、結果的に見事に整合し、意義深い式典となりました。

最初の胸像は 1919 年（大正 8 年）、愛弟子濱野弥四郎の提唱で台北市水道水源地に建立され、除幕式は同年 3 月 30 日に行われました。この水源地が現在は自来水博物館となっています。この胸像は、第二次世界大戦の最中、姿を消し、その後再建されることはありませんでした。そこに戦争の悲惨な影を想像することは容易でしょう。しかし、戦後 70 数年という歳月がいろいろなわだかまりを押し流しました。バルトン先生の業績は、再評価され、台湾の人々の発意で復元されることになったのです。このことは、日本と台湾の友好関係の増進と言う観点からも画期的な出来事です。

復元胸像は、台湾の著名な彫刻家・蒲浩明氏の手で進められ、昨年の夏、完成しました。台北市は、当初は昨年 9 月下旬開催された水環境国際フィーラムの期間中に除幕式を挙行する予定でした。ところが、新型コロナ禍のため延期の已む無きに至りました。この状況に鑑み、本会は、昨年 8 月 20 日恒例のバルトン忌と併せて胸像復元祝賀会を駐日代表処ホールで開催しました。

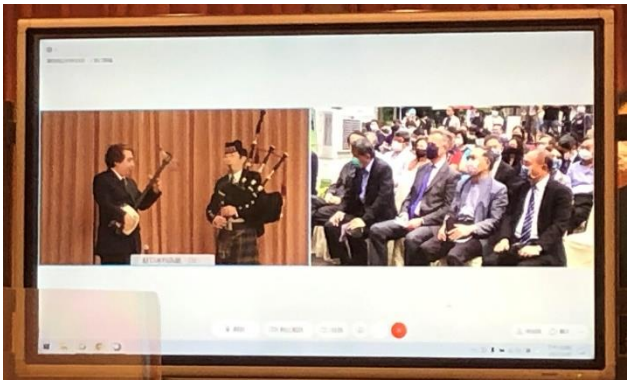
台北市当局は、開催月日の検討を重ね、台北市長の決断により、最初の胸像除幕式が行われた 3 月 30 日と決

除幕のシーン（台北）　出所; TAIWAN TODAY (2021/3/31)

めました。さらに、謝長廷駐日代表と柯文哲台北市長が協議され、リモート同時開催方式とする新方針を打ち出しました。

柯文哲市長は、除幕式で次のように挨拶されました。「今日では、蛇口を回せば綺麗な水が得られます。百年前は、容易ではありませんでした。このような発展をもたらしたバルトン先生の功績をたたえ、胸像が復元されました。私達は、綺麗な水を飲むとき、常に先人の努力に対する感謝の気持ちを持たなければなりません。胸像復元を通して、台日英 3 国の友好関係の増進を期待します。」

東京会場からは、謝長廷代表が次のような祝辞を述べられました。



ケヴィン・メッツ氏・山根篤氏の協演に耳を傾ける台北の参加者

「代表処は、新型コロナ禍を乗り越え、除幕式の共同開催が実現出来たことを大きな喜びとするものです。リモート共同開催は、初めての試みであり、台湾と日本の今後の交流のスタイルに新風を吹き込むことでしょう。私達は、バルトン先生の水道建設の功績を偲ぶだけでなく、先生が提唱された“「生命の水」を守ることは、「健康と幸せの無限の循環」を達成すること”という考えを多くの人々と共有できるように努力しなければなりません。」

除幕式典では、先生の玄孫ケヴィン・メッツ氏がお礼の言葉を述べ、先生に捧げる自作の追悼曲を津軽三味線で演奏しました。同氏は、日本を代表する津軽三味線奏者です。引き続き、三味線とバグパイプのコラボレーションに移り、「スコットランド・ブレイブ」及び「アメージング・グレース」の 2 曲が演奏されました。バグパイプ演奏は、バグパイプ奏者・山根篤氏が当たりました。お二人は、音楽を通して互いを認め合う親友です。

祝辞は、先生の曾孫の日本画家・鳥海幸子さん、スコットランドのアバディーン在住のご親戚・ウイリアム・パトン氏、日本スコットランド協会会長の高橋愛朗氏、東京都知事・小池百合子氏（代読）などから寄せられました。また、先生の胸像復元を記念して「羅漢松」が植樹されました。

「日水コン水インフラ財団」設立と NPO への期待

日水コン水インフラ財団理事長　野村　喜一

設立のきっかけとねらい

自然災害に見舞われている各地域の方々は、先が見通せず、将来に不安を感じている。その解決策を模索するに当たり、先人の知恵の大切さが見直されている。震災を記憶するために建立された碑や防災を意識した街づくりなどのハード面だけでなく、人々の心の中に生活の知恵やしきたりとして受け継がれてきていることも多い。

これら地域性のある課題解決策は、地域を超えて全国で参考になることも多く、また未来に受け継いでいかなければならないこともある。現在取り組まれている個別の研究や体験を集約し、いったん抽象化・概念化する作業を行うことでより広く伝えやすくなるだろう。日水コンはこれまで全国で水インフラに関わる仕事をさせていただいてきたため、水インフラに関わるこの普遍化作業はわれわれなら行うことができるし、やらなければならないと思った。そのため日水コンの別動隊としてこの財団を、各地域と空間を超えた世界とを、そして時間を超えた過去から未来を繋ぐ触媒とすることが、日水コンとしての責務だと考えている。このことが、水インフラの新たな概念の創造（Value-Up）にも繋がると思う。

文化の継承について

文化という時、文明という言葉との差異を問われることが多い。文明と文化の定義については、過去から種々の説があるが、基本、「文明」は地域と深く関係しており、言語の発生のように、その地域でのみ発展し、その文明が強くあれば、そこで育まれたものが広がりみせる場合もある。物や道具などをイメージしても良い。一方「文化」は、茶道や華道にみられるように、強さとは無関係に地域を超えて人々に伝承される、内面的な要素を持つ活動と認識している。

こうした背景から本財団における「文化の継承」を考

えると、支援する行為が地域を超え内面と結びつく普遍性を持っている活動であることが前提となる。それでは本財団における「文化の継承」の具体の活動とは如何なるものなのか、例示的に少し説明をしよう。

本来、水は非常に地域性の高い物質であり、量や質において地域差が非常に大きい。だが、そこにも地域を超える普遍性はあると考えている。即ち、水循環のような思考は、如何なる場所でも考え得るし、水なくして人は生きられないことからしても、地域を超えた水の在り様の普遍性は見出せるだろう。

その最初のステップは、地域毎の水の在り様を明らかにすることから始まると考えている。換言すれば、水と関わる行為（国内外を問わず）を地域や事業毎に見ていくことに他ならない。

財団においては、こうした行為や活動に支援を行い、地域における水との関わり合いの中に普遍性を見出し、その普遍的な部分を分りやすい形で抽出して世に広め、その叡智を未来に引き継いでいくことが文化の継承だと考えている。

NPO・市民団体への期待など

地域の課題は様々で、それぞれの創意工夫が求められる。各地で活躍されている NPO・市民団体の方々は、その中心として既にそれぞれの地域で研究・活動をなされている。そこで今般、水インフラに対して知恵を絞ったり、汗を流そうとされる取り組みを、是非数多くこの財団の助成・支援事業の対象としてご応募いただき、全国の方々の参考となることを願っている。

地球環境基金助成活動報告（2020 年度）

コロナ禍のなかでの活動実施

海外協力部　酒井　彰

2019 年度に採択された活動の 2 年度目が終了しました。バングラデシュでも新型コロナウイルス蔓延のため、この 1 年間、まったく現地を訪れることができませんでした。そのため、契約をしている現地 NGO スタッフへのリモートでの指示によって活動を続けるほかありませんでした。コミュニケーションは、主に電子メール、確認のための電話、確実に指示を伝える必要がある場合は Zoom による対面での指示といった具合です。ただ現地スタッフは経験が浅く、リモートでのコミュニケーションでは、心もとなかったというのが正直なところです。2020 年度の活動は、2019 年度行ったことを、別のコミュニティで実践することでしたので、一度経験した内容を、当該コミュニティの状況に適応させていけばよかったという面があり、何とか 1 年間の活動を終えることができました。

厳しく言えば、現地と意思疎通が十分に行えなかったという以前に、現地スタッフと活動の目的が共有されているのか、スタッフがこの活動にどれだけ関心をもっているのかといったことまで、疑心暗鬼になることもありました。例えば、2019 年度には、トイレ利用のための水汲みと、飲用・炊事関連の水汲みとの動線を分けることを基本としましたが、この点についてスタッフがコミュニティの人との話し合いのなかで考慮することはなかったと言われました。

また、住民啓発のためのワークショップを 2019 年度からバージョンアップしたカリキュラムを考えたのですが、これを実施するにあたって質問はないかと尋ねたところ何もないという回答。本人は質問しないことは、自分の理解力の高さを意味すると考えたのかもしれませんが、ファシリテータの役割を果たさなければいけない立場なのに、自分ごととして深く考えていないと考えざるを得ませんでした。

こんなこともあり、ワークショップのあとで、参加者と共有したかったことがちゃんと伝わったのか、ワークショップ参加者から家族や参加できなかった人への情報伝搬はあったかなどについて、クイズとアンケートによってフォローアップもしました。このフォロー

ワークショップの様子・カードを使って衛生行動を考える

アップの結果からは、参加者であっても理解度が高いとは言えず、改善点がまだあるようです。

そんな、紆余曲折のなかで、計画通りには捗りませんでしたが、ともかく、衛生行動としてのトイレの水洗と手洗いが確実にできるように設備を整え、このための水利用の動線を飲用・炊事用の水汲みの動線から離すことはできました。ただし、新たに始めた 3 つのコミュニティのうち、ここまでやれたのは、ひとつだけでした。このコミュニティで行った衛生行動の変化、トイレの清潔さの変化、女性がイニシアティブをとることの重要性、衛生環境を維持する活動への参加意識の変化等に関するアンケート調査を行いました。その結果から、活動に参加したことで、衛生行動の変容とその習慣化、さらには、コミュニティの女性のエンパワーメントが促されたという結果が得られました。制約の多いなか、少なからぬ成果は得られたと考えています。

衛生設備の改善箇所を示したマップ

2021 年度は、ターゲットとしたコミュニティの人たちが自主的に衛生環境を維持していくだけでなく、現地 NGO や地方政府なども交えて、現地の関係者の手で、こうした活動が発展していけるように、ワークショップの教材やカリキュラム、コミュニティによる管理業務などの汎用化を進めていきたいと考えています。衛生改善によって健康に暮らせるという恩恵が、人々の衛生行動変容の動機付けになっていけるようなきっかけを広めていく素地を残せたらと思っています。

なお、このほど発行された「地球環境基金便り」50 号の Field View のページならびに YouTube でこの活動が紹介されています。

https://www.youtube.com/watch?v=wG0fxMZCNAc

「地球環境基金便り」ご希望の方はお申し出ください。

『江戸名所図会』に描かれた江戸の下水道（1）

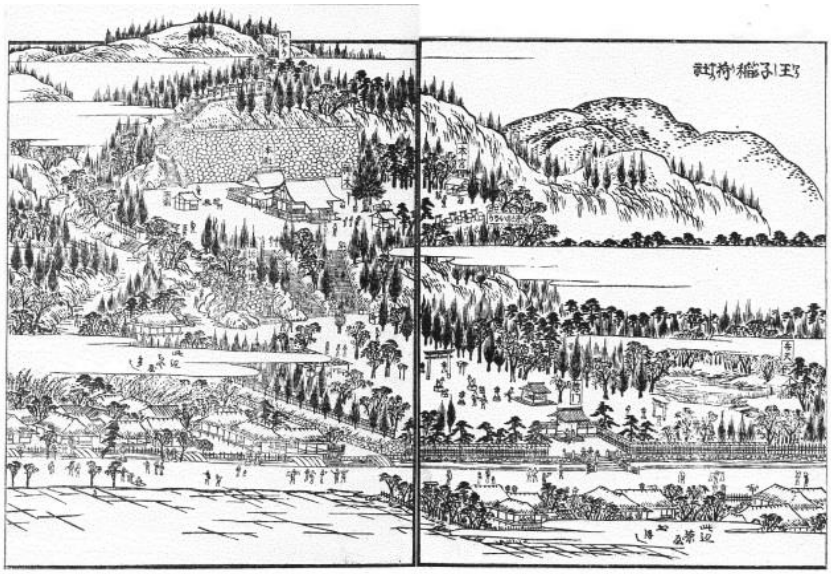
本会会員　栗田　彰

これまで、『江戸名所図会』に描かれた「江戸の下水」について調べてきたものは、江戸の中心市街地のものばかりでした。今度は少し場所を変えて、江戸近郊（とは言っても現在の東京都 23 区内になりますが…）の下水を見てみたいと思います。今回はその連載の第 1 回目です。

『王子稲荷社』

『江戸名所図会』の「王子稲荷社」の項に『当社は遙(はる)かに都下をはなるゝといへども、常に人絶えず。月毎(つきごと)の午(うま)の日には殊更詣人群参す。二月(きさらぎ)の初午(はつうま)にはその賑(にぎは)ひ言ふもさらなり。飛鳥山(あすかやま)のあたりより、旗亭(さかや)、貨食舗(れうりや)、或いは丘に対し、或いは水に臨んで軒端をつらねたり。実にこの地の繁花(はんくわ)は都下にゆづらず』と、その賑わい振りが記されています。「旗亭」は「飲み屋」で、「貨食舗」は「料理屋」でしょう。

現在の区分地図帳とも言える『江戸切絵図(えどきりえず)』の「染井王子巣鴨辺絵図」にも、王子稲荷社の前の道路に面したところに「茶屋多シ」「茶屋」と書き込みがされていま



す。『江戸名所図会』にも同じように、図の左の方と、右の下の雲の棚引いているところに『此辺ちや屋多し』、『此辺茶屋おほし』と書かれています。この辺りは江戸の人たちの行楽地だったのでしょう。

稲荷社の「惣門」の前の道路の端に大きな石組の下水が作られています。稲荷社の惣門前や脇の道、道路沿いの茶屋への入口前にはかなり立派な「下水橋」が架けられています。また、茶屋への入口近くには「石灯籠」が描かれているのは、夜になってから茶屋に出入りする客のためなのでしょうか。人通りの多い道筋だったのかも知れません。「王子稲荷社」は、北区岸町一丁目に現存しています。

運営委員会より

① 2021 年度の総会は、6 月 26 日（土）に開催することが決定されました。今年度は役員改選の年にあたりますので、新たな方にも運営に参加していただきたいと考えています。また、20 年間ほぼ変わらないままの定款についても、改正案をご提案できたらと考えております。

② 2020 年度事業計画では、「水循環基本法をめぐる講演会ならびにシンポジウムの開催」をあげておりましたが、コロナ禍、国会請願につなげることを意図していることから選挙の時期との兼ね合いなどから昨年度中に実施することはできませんでした。2021 年度開催予定の研究発表会と併せて開催することを予定しています。

編 集 後 記

栗田さんの連載が始まりました。最近は都市計画学会から原稿を求められるなど、健筆は相変わらずです。楽しみが増えました。期待させていただきたいと思います▶日水コン・水インフラ財団野村理事長からも寄稿いただきました。私も財団の理事を務めさせていただくことになりましたが、本会と水インフラ財団との親和性は高いと思いますので、水と社会との関係をより深く考えていくことができればと思います▶この 1 年、多くのイベントがリモート開催となりました。私も定年後、1 年限りということで続けていた講義、公的機関の理事、自治体の委員会などもほとんどがリモートでの出席となりました。記事でも書かせてもらったようにバングラデシュでの活動も遠隔から指示することで、何とか継続させ、今後の見通しを確保することができました▶バルトン先生の復元胸像除幕のセレモニーも台北―東京間で同時開催ということで、日本から現場に行けないことを残念に思う方も少なくないはずですが、津軽三味線とバグパイプの協演を台北の方にもお聴かせすることができるなど、魅力的な演出だったと思います。ただ、東京では、密を避けるため、参加者を制限せざるを得なかったことは残念でした▶パンデミックが起きたとき、ICT が普及してなかったら、これらのイベントや活動はどうなっていたのかと思うとともに、ICT がもっと世界中に普及すれば、バングラデシュでの活動の一環として行ったワークショップへのリモート参加も可能であったのにと思う次第です。

（酒井 彰）

特定非営利活動法人　日本下水文化研究会
〒101-0027 東京都千代田区神田平河町 1 番　第 3 東ビル 710 号室
e-mail: jade@jca.apc.org
URL: http://www.jca.apc.org/jade/index.htm
URL(ブログ): http://blog.goo.ne.jp/jadetokyo